

式辞（抜粋）

27名の、卒業生のみなさん、ご卒業、おめでとうございます。心から、お祝い申し上げます。ただいま、一人一人に手渡した、卒業証書は、中学校の全課程を、修了した証明であるとともに、九年間の義務教育を、修了したことの、証明でもあります。今日のこの日まで、皆さんを育て、支えてくださった、保護者の皆さま、地域の皆さまをはじめ、全ての方々への感謝の心を忘れないでください。

さて、卒業の日を迎えたみなさんは、今どんなことを考えていますか。明日から、中学校に登校しないということ、どのように感じていますか。卒業というのは、「ある段階や時期を通り過ぎる」との意味があります。つまり、みなさんで言えば、義務教育という段階を今日で通り過ぎ、次の段階へと進んでいく、そのことをみんなで祝福する。このような意味が含まれているのではないのでしょうか。卒業の日を迎え、新たな舞台へと進みゆくみなさんに、2つのこととお話したいと思います。

まず第一に、「学びを生かせる人になってほしい」ということです。みなさんは、義務教育9年間でたくさんのことを学び、体験してきました。そして、これからも自分の選んだ道に進み、たくさんのことを学んでいきます。その学びは、いったいどのようなものだったのでしょうか。

日々の各教科の勉強、部活動、様々な行事、友達や後輩との交流、地域の方々と創り上げた企画など毎日たくさんのことを考え、経験を重ねてきました。今それらを振り返った時、一つ一つが、中学校時代のすばらしい思い出として輝き始めているかもしれません。しかし、みなさんが、今まで一生懸命頑張ってきたことを、思い出の中にすべてしまい込んでしまうのは、まだ早いのです。なぜなら、その中には、これからの人生を切り開くためのヒントがたくさん詰まっているからです。かほくまつりでの神輿の復活、スイーツづくり、最後までやり遂げることで得られたものは何でしたか。地域の方々が笑顔になってくれた時に何を感じましたか。友だちとの協力、多くの人の支えを実感したのはどんな時ですか。部活動で自分の思い通りにできた時、また、思い通りにできず悩み涙を流した時、どのようなことを感じましたか。清流祭で創り上げた劇にどのような思いを込めましたか。友達と笑いあった時の心地よさ、ちょっとしたことで、気まづくなった時、どんな風に仲直りをしましたか。まだまだ、数え切れない経験の中から、たくさんのことを学び感じとってきたことと思います。そんな心の中に刻まれた学びを、新たに始まる生活の中で生かしていくこと、そのことが、何よりも大切になります。

生き方の核となり、羅針盤のように進むべき道を照らしてくれるたくさん学びを、次の飛躍の舞台でも、ぜひ生かしてほしいと思います。

2つ目として、みなさんは、今年度の生徒会目標を覚えていますか。もちろん覚えていることと思います。それは「挑む」ということです。私はみなさんに「挑み続ける人になってほしい」と願っています。中学校生活、特に最上級生としてのこの1年間は、目の前に立ちはだかる「壁」を乗り越えることに挑んできました。時には、壁にはばまれ、限界

を感じることもありました。しかし、あきらめることなく、壁を乗り越えるために必至にもがいてきました。そして、生徒会長が体育大会の時に言った言葉に象徴されるように、「**限界の向こう側は楽しかった**」という何とも言えない達成感、充実感を味わってきました。

みなさんが、私たちに残してくれたもの、それは「常に目の前にある壁に挑む姿勢」です。日々の学習、体育大会や清流祭、合唱、かほくまつり、部活動や駅伝、陸上大会など、中学校生活の様々な場面で、自分自身の壁を乗り越えた時、歓喜の姿、やりきった姿を見せてくれました。その本気の姿を見る度に、みなさんの成長を実感することができました。強烈な印象を残して、本校を卒業するみなさんの姿は、私たちの脳裏に鮮明に焼き付いています。そして、今日、卒業の日を迎えたみなさん自身が、後輩たちにとって、乗り越えるべき大きな壁となってくれたことを何よりうれしく思います。

みなさんが、一年間常に意識してきた「挑む」という姿勢も中学校卒業と共に、次の挑戦の舞台に持っていく大切な宝物、だと思えます。

もうすぐ、多くの尊い命が失われた東日本大震災から八年目を迎えます。この日を迎えると、いつも「生きる」ことの意味について考えます。福島市出身の詩人、長田弘（おさだひろし）さんは、東日本大震災のあと、「朝が明けて、陽が高くなって、やがて日が暮れて、というふうに、だんだんと変わっていく、何でもない一日」。実は、この一日こそ、「ありふれた奇跡」だったと思い知らされた、と語っています。ありふれた、今日という一日。そのありがたさを見つめ、感じる事ができるのが3月11日です。東日本大震災で失われたたくさんの命、生きてくても生きることができなかつた命。その見えない命を見つめ、思いをはせる時、自分の命がいかに価値あるものなのか、かけがえのないものが見えてきます。何でもない一日が、ありふれた奇跡なのは、そこに命の輝きがあるからではないでしょうか。これからの新たな生活で、みなさんは、命をさらに輝かせてください。そのためにも、「学びを生かせる人」、「挑み続ける人」であってほしいと思います。

「命を使う」と書いて「使命」と読みます。みなさん一人一人に自分にしかできない命の使い方、命の輝き、「使命」があります。中学卒業とは、そんな自分の使命を見つけるための、旅立ちとも言えます。今日という一日をしっかりと積み重ねることで、一人一人の使命が、一人一人の未来が見えてくるはずです。みなさんが、どんな未来を描くのか、ここにいるみんなが楽しみにしています。また、期待していることをけっして忘れないでください。

平成31年3月9日
山鹿市立 鹿北中学校長 郡 一路